

芸術学部創立30周年記念に寄せて

学会活動と教育

芸術学部写真学科教授 木下 堯博
(1984年～1987年度 芸術学部長)

一般的に学会活動は、学術研究をサポートする大切な生命線であり、研究発表と論文刊行が重要な柱となる。日頃の研究成果やフィールド調査などをまとめ、口頭発表し、いろいろの批判や助言がなされ、オリジナルな学術論文をまとめることができる。

これらの論文や報告書は教育活動にも連動し、新しい知見や発見を各自のカリキュラムに沿ってわかりやすく指導していくことにより、次世代への学問継承にもつながる。従って、研究を支える学会活動と教育とは、相互に交流し合って、それが相乗効果をもたらす。このことは大学にとって大きな足跡を残す結果となろう。

近年、インターネットの発展により、世界中の学会活動を研究室で対応することが可能となり、一度も会ったことのない研究者と学会以外場でコミュニケーションできるようになったことは喜ばしいことだ。ホームページにCG、アニメ、音声、バーチャルリアリティーなどのイメージを駆使し、研究成果を一般の人達に公開できるのも容易になった。

いわゆるマルチメディアの活用が、学会活動や教育活動を促進し、大学の生き残りへの道を開くことになろう。

芸術学会も他に先駆けて、インターネット利用の作品展、論文発表などができるようなシステムの構築を行い、世界に翔いていく必要がある。

芸術学部創立30周年を迎えるにあたり、一層の躍進を望むものである。(1996年11月25日)

「殻を脱げない蛇は死んでしまう。」

芸術学部美術学科教授 豊福 孝行
(1988年～1993年度 芸術学部長)

「オ久シ振りデス。ゴ無沙汰シテオリマス。」

お互いに学内に勤務しているもの二人の間で聞かれるこの様な「アイサツ」に30年の歳月と学園の規模の大きさを感じるこのごろであります。

これまでの紆余曲折を回想するとき、豪雨の時もあったし、曇り空が続いた時期も思い出されます。あれほど辛い思いをした洪水も、そのあとには沃土が置かれていくという確信があったのか、農民の作物に対する確執に似た心境で次の年の収穫に期待したものでありました。

数年前の大学設置準備の大綱化に際して、おそまきながら学部の独自性は如何にあるべきかという模索が始まりました。今、21世紀を目前にして学部の未来像があらゆる分野で話し合われる時期でありましょう。

『時の流れに身をまかせて』という優雅な身分でないことを充分自覚している我々にとって…。